



## 国際河川メコンの人びとの暮らしと開発



メコン河とその流域は「未開の地」であり、「発展のために開発が必要」という文脈で語られることが少なくありません。一方で、人がこの地域で暮らし始めたところから今この瞬間に至るまで、河川と周辺環境は多くの人々の生活の場として利用されています。

今回は、メコン・ウォッチのスタッフとしてラオスを中心に活動されてきた東さんから、メコン流域に暮らす人びとの河との関わり、メコン河の開発が彼らの暮らしにどのような影響を与えてきたかについてお話していただきます。

### ●講師プロフィール

東智美（メコン・ウォッチ副代表理事）

東京都出身、一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了（社会学博士）。メコン地域の開発・環境問題の調査研究・政策提言に取り組む NGO メコン・ウォッチのスタッフとして、2006 年 10 月～2014 年 2 月までラオスに駐在し、住民参加型森林保全事業の実践や水力発電事業のモニタリングに関わった。オーストラリア留学、産休・育休を経て、現在は、東京をベースに、メコン・ウォッチのラオス・プログラムを担当している。主な著書『ラオス焼畑民の暮らしと土地政策：「森」と「農地」は分けられるのか』（風響社、2016 年）。

### 【日時】

12 月 5 日（月）14 時 30 分～16 時

### 【会場】

愛知県立大学長久手キャンパス・講堂

### 【対象】

学生、教職員、学外一般どなたでも

参加無料・申し込み不要  
直接会場へお越しください

### ●問い合わせ先：愛知県立大学 研究支援・地域連携課

E-mail: renkei@bur.aichi-pu.ac.jp

TEL: 0561-76-8843

主催：愛知県立大学多文化共生研究所

共催：愛知県立大学地域連携センター

## 「アジア・新興国プログラム」連続セミナー(3) 国際河川メコンの人びとの暮らしと開発

特定非営利活動法人 メコン・ウォッチ  
東智美

### 国際河川メコン河

メコン河は、源流をチベット高原に発し、中国雲南省、ビルマ／ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを流れ、南シナ海に注ぐ。全長約 4,909 キロの川の流域には、約 6,000 万人の人びとが暮らしている。

メコン河は、雨季（5 月～10 月頃）と乾季（11 月～4 月頃）で水位が大きく変動するという特徴を持っている。メコンの魚は、この水位変動のサイクルに合わせて、長距離を回遊する。メコン河に生息する魚の種類は 1100 種に上るとされ、アマゾン河に続いて世界第二の生物多様性を誇る。メコン河下流の淡水魚の漁獲高は 75～210 万トンで、世界最大の淡水漁場となっている。また、傾斜の緩やかな大地をゆっくりと流れる水流は、豊富な栄養分を含んだ土砂を運び、河岸やベトナム・デルタの農業をも支えてきた。

国際河川としてメコン河を見ると、中国を除く下流 5 か国は、支流も含めれば、全ての国が上流でもあり、下流でもあるという関係にある（地図参照）。例えば、ラオスにダムが作られれば、メコンの流れが運ぶ肥沃な土壌に支えられるベトナムの穀倉地帯メコン・デルタは大きな打撃を受けるが、一方、ベトナム国内のメコン河の支流に建設されたダムによって、下流のカンボジアでは洪水や水質悪化による深刻な環境・社会影響が引き起こされた。メコン河の開発問題を見ると、こうした国と国との関係にも注目する必要がある。



### ラオスの川と人びとの暮らし



メコン河流域全域の平均年間流量の 3 割以上を供給しているラオスは、2020 年までに低開発途上国（LDC）からの脱却を目指して、経済開発を進めている。過去 10 年、8%前後の高い経済成長率を達成する一方、今も国民の 7～8 割は農村部に暮らしている。そうした農村部の人びとの暮らしは豊かな森林や河川の資源に支えられてきた。

ラオス南部チャムパサック県にシーパンドン（四千の島々）と呼ばれる地域がある。メコン河が複雑に分流し、川の中に多くの島が浮か

んでいることからその名が付いた。「アジアのナイアガラ」とも呼ばれる景観美を誇るコーンの滝や、絶滅危惧種イラワジイルカ（カワゴンドウ）の生息地を有し、ラオス有数の観光名所となっている。

豊かな漁業資源に恵まれたシーパンドンでは、漁業は人びとの食と経済活動を支えてきた。また、魚は発酵食品や干物に加工され、かつては米などの必要な物資と物々交換されてきた。さらに、多く獲れた人は他人に分け与えるといったことにより、魚は社会福祉的な相互扶助にも一役買ってきた。

## ラオスで進む本流ダム開発

豊かな漁業資源を採取・利用する人びとの知恵が培われてきたシーパンドンでは、現在、マレーシア企業によってドンサホン・ダムの建設が進んでいる。中国を除くメコン河下流では、同じくラオスに建設中のサイヤブリ・ダムに次ぐメコン河本流のダム開発となる。元々雨季と乾季で水位差がある流量を一定にすることによる魚類や水棲生物への悪影響とそれに伴う漁業被害が予想される他、希少種で観光資源でもあるイラワジイルカの生存を脅かすことになる。暫定メコン委員会事務局が 1994 年に発表した報告書には、シーパンドンのコーンの滝を「生態学的にユニーク、メコン河下流の縮図」とし、「こうした自然豊かな貴重な場所は、開発事業から守られるためのあらゆる努力が払われるべき」としている。また、その後の調査でも、この地がメコンの魚の回遊にとって重要な通過点であることを明らかにしている。

それにも関わらず、水力発電開発によって「東南アジアのバッテリー（電源）」となることを国策とするラオスは、メコン河委員会（MRC）が定める「通知、事前の協議および同意の手順（PNPCA）」を踏まずにダム開発を強行している。その背景には、一党独裁政権の下で影響住民や市民社会が自由に発言することができないというラオスの政治・社会状況もある。

## メコンの将来と私たちの暮らし

私たちはダム開発を「経済発展 vs. 環境」という構図で見がちだが、ドンサホン・ダムの事例からは、発電による収入と観光・漁業への打撃という収支が十分に検討されないまま開発が進められている問題や、開発によって利益を得る外国企業と一部の権力者と被害を受ける漁民や農民という構図が見えてくる。また、ダムによって自然資源だけではなく、それを利用してきた人びとの知恵も失われようとしている。

今回のセミナーでは、メコン地域、特にラオスの話をしてきた。私たちは「豊かな日本、貧しいラオス」と考えがちだが、果たしてそう言い切れるだろうか。確かに、日本では水道の蛇口を捻れば安心して飲める水が出てくる。ラオスでは、水道がなく生活用水を井戸や川の水に頼る地域も多い。一方で、日本では普段の暮らしのなかで水の恵みに接する機会は少なく、限られた水源に頼っているため、一度災害が起これば、飲み水にも事欠くことになる。メコン流域では、今も多くの地域で人びとは水の恵みとともに暮らし、自然資源を利用する豊かな知恵が受け継がれている。経済発展に伴う様々な環境・社会問題を経験してきた日本の教訓をメコンの人びとが学ぶ必要があるのと同時に、メコン河が育んできた豊かな自然と人びとの暮らしの関わりから、私たちが学ぶ価値もあるのではないだろうか。

## 参考文献

メコン・ウォッチ. 2013.『ツールキット:自然と私たちの未来を考える～メコン河流域と日本～』(<http://www.mekongwatch.org/platform/bp/index.html>)